昭和三十八年十二月二十日印刷 昭和三十八年十二月二十五日発行
昭和二十一年十月十日第三種郵便物認可（毎月一回二十五日発行）

不二

一月号

不二歌道会

第十九巻 第一号 通巻第一八九号（ひむがし通巻第二四巻・第三三三号）

昭和三十八年十二月二十日印刷 昭和三十八年十二月二十五日発行
昭和二十一年十月十日第三種郵便物認可

不二 第十九巻 第一号 昭和三十九年一月号

不二第十九巻 第一号 通巻第一八九号（ひむがし）通巻第二四巻・第三三三号）定価五十円

編輯後記

○昭和三十九年の新春を迎へた。本年は大東塾創立二十五周年の年であり、塾十四士建碑完了の年であり、その記念事業たる大東学生会館建設の年である。また本部移転の年である。即ち、「集中一新」の年である。この一新はすべて本格的戦ひのための一新であることは言をまたない。

○建碑募金も待望の一千万円台に入つた。これは道友各位の至誠の結晶で、金銭を越えた祈りそのものである。この結晶の威力は世間の幾億円、否数十億円の威力を発揮するであらう。三月末迄あと僅かである。最後の御努力を切にお願ひする。

○塾創立二十五周年を迎へ、募金終了後も、このもり上がつた力を分散せしめることなく、更に充足集中せしめるよう、年頭より、この点も充分配慮の上で計劃をたてられたい。

○その一つとして物故同志遺詠集への努力をお願ひしたい。本部に於ては塾創立二十五周年の記念事業の一つとして『物故同志遺詠集』の刊行を期してゐるがこれは諸友の御協力なくしては不可能であるので、宜しくお願ひしたい。

○本号より明治維新百年祭への具体的努力の一つとして「明治維新志士列伝」の掲載を開始した。二月号は〝藤田東湖父子〟の予定でそれぞれ道友関係に執筆を依頼してある。これは相当長期にわたつて連載する予定で、逐次道友関係に執筆を依頼申し上げるので、郷土出身の志士等についてはあらかじめ調査研究をはじめて置いていただきたく、地方歌会等では本年は研究会、遺跡巡拝調査等を心懸けられるやう要望する。

○本号に国学院大学の樋口清之博士に特にお願ひして「神武天皇紀の信憑性」と題する貴重な論文をいただいた。これは考古学の立場から古事記・日本書紀に語られてゐる神武天皇の建国の物語りが架空なものでないことを純学問的に実証されたものである。これは戦後の歴史学界が少くとも崇神天皇以前はすべて架空だとしてゐる説を根柢から覆すもので、この論文が投じた一石は歴史的なものになるであらう。この一石はやがて万波を呼んで更に精緻真摯な研究が学界の各方面に起り、日本上代史の真姿が明らかにされてゆくであらうことを確信する。樋口教授の今後の御努力を更に切願申上げて止まぬとともに若き学徒の奮発を期待する。

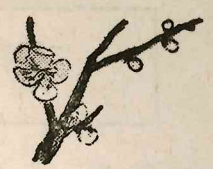
○昨年末に当り滞納誌代会費の払ひ込み、年末支援金のことをお願ひしたところ、道友各位、先輩各位から次々に御送金に預り衷心より有難く厚く御礼申上げます。建碑募金と重つて御多用のところをおしての御送金萬謝申上げて居ります。

○本年の表紙は小山寛二先生に彩管を揮つていただくことになつた。本号掲載のものは、「山川降神妖魅嬉戯」と題する元旦試筆である。

○本年は更に本誌の内容の充実を期したく、道友各位の御協力をお願ひします。三月号は小林順一郎先生の追悼号として相当充実したものを刊行する予定である。

○不二歌壇の方も我々の本姿のままいよいよ充実させたく、本年は一首でも二首でも毎月の投稿を心懸けられるよう切望致します。（鈴木生）

不二 第十九巻第一号
昭和卅八年十二月廿日印刷
昭和卅八年十二月廿五日発行
（毎月一回廿五日発行）
東京都渋谷区上通一の五 編輯兼発行人 鈴木正男
東京都渋谷区上通一の五 印刷所 大東塾印刷部
東京都渋谷区上通一の五 発行所 不二歌道会
振替東京一九〇四〇一番
電話青山 ㈹ 〇九六三番



不二

集中一新を……影山正治（四）

詠

甲辰の年……影山正治（六）
詩集「寒色」……三浦義一（六）
秋思……浅野晃（六）
風雪神洲景……小山寛二（六）
冬山膚など……荒木精之（七）
迎春……赤木一郎（七）
歳晩抄……長谷川幸男（八）
朝づとめ……原真弓（八）
迎春の歌……藤井芳人（八）

草

全快の歌……田中克己（九）
越年迎春の歌……影山銀四郎（九）

日本浪曼派の問題（三九）
「勤皇村」のこと……影山正治（一〇）
神武天皇紀の信憑性……樋口清之（二〇）

天皇の御本質と神道……庄本光政（二八）

詠

年賀寿詞……酒井光穂（三五）
白珠……森武次（三五）
心新たに……宇都宮惟中（三六）
初冬吟……細木勲（三六）
新年雑詠……三原鼎（三六）
身辺詠……林耕之（三六）

草

旅と碑と……鮓本刀良意（三七）
よき便り……吉本日路志（三七）
琵琶湖……谷田糸子（三七）

明治維新先覚志士列伝(一)
高山彦九郎先生とその郷里……篠原全一（三八）

不二歌壇……影山正治選（四五）

表紙画……小山寛二

和気宮の大前に立ち悠遠の血潮の流れここに聴きつつ
思ひみよ十五代前に遡り一人のわれに三千万の祖
元旦の空ひるがえる日の丸の旗すがしさに還らざらめや
よらざれば遠きが如し大前に神代につづく道みゆるなり
全世界うなづく随に日の出づる日本島根の美し国そも
こととひて醜さばえなす今し世に言向けやせむ時来るかも
憲法をわれに強ひたるアメリカの暴挙はつひに原爆を越ゆ

歳晩抄

長谷川幸男

大賀知周在さば歎きて歌心とぼしきわれをとがめたまはむ
逝く年の夕盃のかなしみは言はず静かに歌を語らむ
うらなげくことのみ多く逝く年をせめて今宵は思はざらめや
音たてて地震すら過ぎぬ世の様のゆゆしさ思ふ師走夜更に
「一文士の告白」を読む
草莽の祈りといはめさりげなく君が書きたる文のかなしさ
尾崎士郎在りと思へば焼太刀の鋭刃の雄心湧くとうものぞ
いたつきの君を祈りて今朝もまた師走の街にわれは出でゆく

朝づとめ

原真弓

大孝道場の側面の「お山」は、東田古墳と呼ばるる霊地なり。曾て古鏡其の他の出土品ありしところ。影山の老刀自は朝夕山上の拝殿に通はれ御勤めをせらるるとぞ。七月九日早朝、刀自があぐる祝詞の声を聞き、起き出でて「お山」の石階を昇る。即ち拝殿の方を望み見て感有り。

ひたむきのおももち挙げて、神の前行きかへりつつ、声高に祝詞をまをし、御鏡の前に坐りて、おほどかに神言延ばへ、釣り太鼓とどろ打ち鳴し、ただにしも唱へ言する、二ときに余れる間、畏しや神に仕へて、たふときわが刀自。

仝く片歌

高らかに祝詞延ばへてたふとしや嫗
指組めるこのはげしさを見むと思はずき
ぬさ振らす刀自のまなこを直に見瞻る

迎春の歌

藤井芳人

そこはかとたのしきことをおもへただにひとしのあさのてるひにむかひ
かみまつるむかしのてぶりなつかしきにひとしのはるいまめぐりくる

○

うすあかね比良山の屋根にさしそむる湖まだ闇き宿に見えつつ
水見ても木草を見ても美しき秋山の道ひとにむかへば
長命寺のぼるなだれのうらじろの裏かへし吹く山の秋風
遠世人こころいちづにきざみたれ道の辺に坐すこれの石仏
肩くますめをの道陸神まじります遍路のまがり秋の陽にてる
竹にからむ葛のもみぢ葉竹を吹く風のまにまに揺れて音だつ
沖遠くいさりする舟五せき小さく見えて琵琶の湖ひろし
風とほる風の道見ゆうらがれし尾花のなびき年暮れむとす

全快の歌

田中克己

わが病ひなほりにけらし富士箱根雪いただける峰秀を見れば
ローレライ岩ほに立ちて魔女めろがうたふをきけばわれはたのしも
わが声は老いてにごれりすみとほる声もつ子らし来り歌はな
わが老いていよよにごれる歌声をたださんとして子らよ来れな
わが病みし夜々に来りしナハティガル（夜鶯）いまはいづこの山に行きしや
わが病ひいよよはるけくこの日ごろ楽しくをりぬ飯うましとて
父母も妻子もおきて逝く我と思はざりけり癒えしこのごろ

越年迎春の歌

影山銀四郎

歳末真人を想ふ

一布衣の蒲生君平草かげの田中正造真人ふたり
日光の友へ返し
男体につゞく雪雲あらはれぬ師走なかばとなりにけらしな
友へ
なにとてもたのしみのなき日々なれどけふはうれしき君がおくりもの
迎春の歌をもとめられ三首
正月にはなにをせむなどといふたのしみもいまはほとほとなきをさみしむ
えんにちのまちにひびけるまめたいこ正月よこい何ごともなくかにかくに正月ぞくるせめて子にとし玉やりてたのしまんとす
賀状にしるすべく
たつどしの正月はきぬはつらつと雲まきおこれ天もとどろに
那須茶臼嶺三首
茶臼嶺に雲まきおこり雨すでに雪と化しつつ日にまぎれ飛ぶ
茶臼嶺は堪へてゐるがに奥羽路につづく山々の上のくろ雲
茶臼嶺に雲ふき流れ氷となりてわが頬にさすよ日に乱れつつ